

三菱商事の社会貢献活動

Moving forward with the society



Contents

社会貢献活動への思い～Top Message	01
三菱商事の社会貢献活動	02
・ 基本理念	
・ 三綱領	
・ 三菱商事の社会貢献活動の原点	
特集・障がい者スポーツ支援 DREAM AS ONE.	04
活動紹介	06
・ 地球環境	
・ 福祉	
・ 教育	
・ 国際交流・貢献	
・ 文化・芸術	
・ 東日本大震災復興支援	
・ 社員ボランティア	
・ MC FOREST	
ボランティアに参加しました!	28
地図で見る社会貢献活動	30
数字で見る社会貢献活動	32
歴史で見る社会貢献活動	34

社会貢献活動への思い～Top Message

代表取締役 社長

2015年3月

小林 健



三菱商事の社会貢献活動は、1973年の藤野社長(当時)による世界貿易センターにおけるスピーチをきっかけにスタートし、40年以上が経過しました。その間、世界のビジネス環境が大きく変化し、また、企業の社会に対する責任がますます問われるようになりました。当社は、ビジネス環境の変化に対しては柔軟に対応する一方で、社会に対する責任については、これを果たすべく一貫して取り組んできました。これは、創業以来の精神である「所期奉公・処事光明・立業貿易」という「三綱領」の精神が連綿と受け継がれてきた証と考えます。

40年を超えた当社の社会貢献活動も、現在さまざまな分野に広がりを見せていますが、「社員の自発的参加」「継続的活動」という点がその大きな特徴だと考えています。東日本大震災の復興支援活動にも、その特徴がよく表れています。震災直後から4年にわたって、延べ3,500人以上の三菱商事および三菱商事グループ社員がボランティアに参加。私もこれまでに10回以上被災地を訪れていますが、そのたびにボランティア活動に対して強い信念を持って継続する社員の気概を感じ、非常に誇らしく思っています。

2014年7月1日、三菱商事は戦後の財閥解体を経て大合同を実現し、新生・三菱商事が発足してから60周年を迎えました。この節目を記念して、社会と共に歩み続ける企業姿勢をさらに明確にし、社会貢献活動をいっそう充実させるべく、障がい者スポーツへの支援を強化することに致しました。これまでも、世界トップレベルの車いすマラソン大会である「大分国際車いすマラソン大会」や「脳性麻痺7人制サッカー」の支援など、微力ながら障がい者スポーツ発展のお手伝いをしてきましたが、障がいを持った方々が一人でも多くスポーツに親しむことが出来るよう、障がい者スポーツの裾野をさらに広げることに力を入れていきます。また、障がい者スポーツが与えてくれる勇気と希望と深い感動を共有し、応援の輪が広がるように、障がい者スポーツに対する認知度・理解度を高める活動を積極的に行っていきます。

会社発足60年という節目を経過し、当社はこれからも広く社会に貢献し、常に社会と共に成長し続ける企業でありたいと思っています。



2013年6月、宮城南三陸町での復興支援ボランティアにて

三菱商事の社会貢献活動

社会のため、地球のために、私たちができること

三菱商事の企業文化には、社是である三綱領を拠り所に、真に豊かな社会の実現を目指して、地域社会や国際社会とともに発展していこうという思いが深く根を下ろしています。1973年には、「企業は社会の一員として社会貢献事業を積極的に行うべきで、そのための経費は企業が社会で存続するための社会的経費（ソーシャル・コスト）として、利益を得る前に負担しなければならない」という認識の下、「社会環境室」が設立されました。以来私たちは、より豊かな社会づくりに貢献すべく、自ら考え実践する社会貢献活動を推進しています。

基本理念

グッド・コーポレート・シチズンとしての自覚を持ち、
地球的視野から社会に対し幅広い貢献活動を行う。

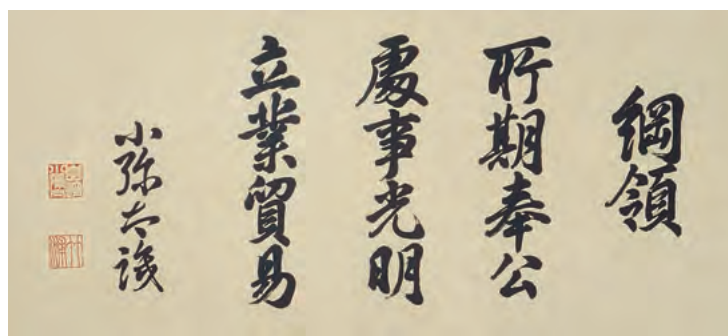


社会貢献活動に関する基本的な考え方

三菱商事の社会貢献活動は、「地球環境」「福祉」「教育」「文化・芸術」「国際交流・貢献」の分野を中心に、世界各地の社員が自発的に参加して汗を流すとともに、継続して活動に取り組むことを重視しています。

三綱領

「三綱領」は、1920年の三菱四代社長岩崎小彌太の訓諭をもとに、1934年に旧三菱商事の行動指針として制定されたものです。旧三菱商事は1947年に解散しましたが、三菱商事においてもこの三綱領は企業理念となり、その精神は役職員一人一人の心の中に息づいています。



所期奉公

事業を通じ、物心共に豊かな社会の実現に努力すると同時に、かけがえない地球環境の維持にも貢献する。

処事光明

公明正大で品格のある行動を旨とし、活動の公開性、透明性を堅持する。

立業貿易

全世界的、宇宙的視野に立脚した事業展開を図る。

三菱商事の社会貢献活動の原点

1973年7月19日、藤野忠次郎社長(当時)は世界貿易センターで、社会貢献の重要性について講演しました。これをきっかけに、同年10月、社内に社会環境室が新設され、実質的に三菱商事の社会貢献活動がスタートします。三菱商事の社会貢献活動の原点と位置付けられる藤野社長講演を抜粋して紹介します。



元代表取締役社長
藤野 忠次郎

「企業の責任」について

豊かさの時代には、人間の生き方について価値観に大きな変化が見られると同時に、成長経済時代のひずみがこれに拍車をかけ、企業の社会に対する責任ということについて、企業特に大企業は、根本的に考え直さなければならない時に来たと考えられます。特に大企業のレゾナデートルは、期間損益の大小によって判断されるべきものではなく、長期的なダイナミズムあるいは長期的な視野に立って、情勢の変化に順応する柔軟な体質を持っているかどうかによって、その存在価値を判断されるべきであります。従って企業は、その企業活動を通じて(生ずる有形無形の)社会的コストをまず負担し、企業としての社会のserviceを提供した後に、利益を享受すべきであるということでもあります。

今後企業は、社会的コストをいかに負担し、住民の自由といかに合致して、住民あるいは個人を抑圧しない環境を整備するかというようなことについて、一般に公表すべきような形を取るべきではないかと考えます。

また、企業は本質的には利潤を追求してその上でもって生存していられるのでありますから、その社会的責任の果たし方も、単純な慈善事業を行うのであっては長続きすることではないと考えられ、企業は企業らしく、短期的に採算がとれなくても長期的にはあるいは採算のとれるかもしれぬといった採算分岐点上のプロジェクトに、積極的に立ち向かうべきであり、かかるプロジェクトが、住民の福祉に関連のある情報・技術・機器の開発であれば申し分のないこととなろうかと考えます。(一部抜粋)

DREAM AS ONE.

Project in Support of Para-Sports

～ともに一つになり、夢に向かって～

私たちは、障がい者スポーツの発展を応援し、
たくさんの人と夢と感動を分かち合いたいと、願っています。

三菱商事には、創業以来の企業理念「三綱領」があり、「私たちは社会とともに歩む企業でありたい」という思いを深く持っています。1973年、藤野忠次郎社長(当時)の「企業は利益を得る前に社会的経費を負担すべき」という意志の下、社会環境室が新設され、私たちの社会貢献活動がスタートしました。その拠り所となったのも「三綱領」です。

私たちの行っている社会貢献活動の中でも、「障がい者への支援・福祉」には、特別な思いをもって取り組んできました。始まりは、障がい者の自立と社会参加支援のために中村裕博士が設立した「太陽の家」(大分県別府市)との出会いです。1979年に太陽の家への支援を開始し、1983年には、両者の共同出資による情報処理会社「三菱商事太陽」が生まれました。単なる障がい者への生活支援ではなく、IT分野という障がい者の新たな職域の開拓を支援し、さらに一歩進んだ社会的自立をサポートする姿勢は、当時から受け継がれているものです。また、障がい者スポーツの振興にも情熱を注いだ中村博士は、大分の地での車いすマラソン大会を提唱。その思いが実った「大分国際車いすマラソン大会」は三菱商事も支援し、今や世界規模の大会となりました。

2014年、三菱商事は戦後の財閥解体を経て大合同以降、新生・三菱商事として発足してから60年を迎えました。この節目となる年に際し、長年にわたって取り組んできた「障がい者スポーツ支援」を、さらに充実させていくことにしました。

「誰もがスポーツに親しむ機会を増やしたい」

「スポーツが持つ勇気と希望、感動を共有し応援の輪を広げたい」

競技者と応援者両面への働きかけを行うことで、ともに一つになって、夢に向かっていける。

私たちはそう信じています。



1

障がい者スポーツの 裾野を広げます

より多くの障がい者・障がい児（先天的な障がいをもつ児童も含む）にスポーツを楽しんでもらう機会を提供します。

2

障がい者スポーツに対する 理解度・認知度を高めます

障がい者スポーツの競技大会やイベントに、より多くの社員及び一般市民がボランティア、或いは参加者としてともに参加する機会を提供することで、障がい者スポーツに対する理解及び認知度を高めます。



障がい児向け スポーツ教室

障がい児を対象としたスポーツ教室、脳性麻痺7人制サッカースクールなど、スポーツをする機会を提供。

※協力：東京YMCA、日本脳性麻痺7人制サッカー協会 ほか



セミナー （ボランティア養成講座）

障がい者スポーツに関する基礎セミナー、及び「ボランティア養成講座」を定期的実施。各種競技大会へのボランティア参加を促進。

※協力：日本障がい者スポーツ協会、東京都障害者スポーツ協会 ほか



スポーツイベント

障がいの有無に関わらず、多くの方が一緒に参加できるスポーツイベントを開催し、障がい者スポーツに対する認知と理解を高める機会を提供。

※協力：日本障がい者スポーツ協会、東京都障害者スポーツ協会 ほか



競技大会

「大分国際車いすマラソン大会」の協賛や、「脳性麻痺7人制サッカー」の大会開催など、選手育成に対する支援を継続するほか、障がい者陸上競技大会を開催。

※協力：大分県、日本脳性麻痺7人制サッカー協会、日本チャレンジドラスリート協会ほか

DREAM AS ONE. チャリティー基金

みなさんのボランティア活動を「DREAM」という仮想通貨で積み立てていきます。
（ボランティア1回参加＝1 DREAM）



三菱商事が、DREAMを換算し、障がい者スポーツの振興に役立てます。

地球環境

地球にある豊かな自然やたくさんの生き物たち。

その豊かさを未来に受け継いでいくため、

地球環境の保全と改善に取り組んでいます。

熱帯林再生実験 プロジェクト



1990～

マレーシア・ブラジル・ケニア・インドネシア

熱帯林再生を目指し 100万本を植樹



2010年10月に名古屋で行われた生物多様性条約第10回締約国会議(CBD-COP10)の中で、2020年までの生物多様性保全の目標である「愛知ターゲット」が作られました。このターゲット達成のために多くの人たちの活動をつなぎ、支えていくために作られたのが「にじゅうまるプロジェクト」です。三菱商事もこのプロジェクトに参加し、多様なステークホルダーとともに生物多様性の保存に取り組んでいます。

世界各地における熱帯林の減少は、人類の存続にもかかわる重大な問題の一つです。熱帯林は、一度破壊されたら元の姿に戻るのに300～500年かかるとも言われ、その減少は、自然生態系の保全や温暖化の原因であるCO₂の吸収、異常気象・自然災害など地球環境の保全に大きな影響を及ぼしています。

三菱商事では、1990年に「マレーシア熱帯林再生実験プロジェクト」を開始し、横浜国立大学名誉教授 宮脇昭博士による潜在自然植生理論に基づく“ふるさとの木によるふるさとの森づくり (Native Forests with Native Trees)”に積極的に取り組んでいます。この理論は、現地固有の植物を密植・混植方式で植林することにより植物の競争を促し、40～50年という短期で自然林に近い生態系をよみがえらせるというもので、「マレーシア熱帯林再生実験プロジェクト」に続いて1992年には「アマゾン熱帯林再生実験プロジェクト」も開始されました。三菱商事は企画から運営管理、資金調達を担当、実験開始から20年以上を経て、樹高20mを超す樹木もあり、驚異的な生長ぶりを見せています。

2006年からはケニアでのプロジェクトも加わり、これらの成果を踏まえて、国際森林年である2011年度からは、国際NGOオイスカをパートナーに、インドネシアの西ジャワ州スカブミ県スカマジユ村を舞台にしたプロジェクトも開始。樹陰でコーヒーを栽培するアグロフォレストリーなどや、学校での環境教育活動なども含め、単なる緑化運動にとどまらない総合的な地域開発プロジェクトという新たな試みを進めています。

本プロジェクトにより100万本以上の植林を実施しました(2014年7月1日時点)。



マレーシアでの植樹祭



ブラジルでの植樹



インドネシアでの植樹
©オイスカ

【宮脇方式による熱帯林再生システム】



未来の命を守る森づくり

宮脇 昭 博士 横浜国立大学名誉教授

1990年、三菱商事が日本企業で初めて「地球環境室」を設置し、その最初の仕事としてマレーシアのボルネオ島でスタートしたのがこの熱帯林再生実験プロジェクトでした。私もそれから20年以上にわたって一緒に歩み、ブラジル、ケニア、インドネシアと活動範囲を広げて、各地で大きな成果をあげてきました。この「今すぐ、どこでもできる『命の森』づくり」は未来のあらゆる命を守る活動です。これからもぜひ継続していただきたいと願っていますし、私もできる限りのことを協力し続けたいと思っています。



森林保全プロジェクト「三菱商事 千年の森」

2009～
日本

三菱商事は、三菱グループの創業者・岩崎彌太郎の生誕地である高知県安芸市において、森づくり事業を進めています。これは、三菱商事として、国内では初の森林保全の取り組みです。地域の環境保全に貢献することを目的に、同市の山林を社有林として保有するほか、市有林の一部を含めた263haを「三菱商事 千年の森」（通称：彌太郎の森）と名付け、将来にわたって森林整備を実施していきます。「千年の森」は、水源涵養等の森林の公益機能増進のための森林保全活動に加え、当社社員や地域の方々による自然体験学習やボランティア活動、環境教育の場としても活用されています。毎年10～11月に三菱商事および三菱商事グループ企業の社員とその家族による「三菱商事 千年の森」森林保全ボランティア活動（約40～50名）を開催。地元森林組合の指導の下、植樹や間伐・受光作業を行い、岩崎彌太郎ゆかりの地なども訪問しています。創業者の故郷で森林保全活動に取り組むことで、当社ゆかりの地への感謝と恩返しをしています。



その他の森林保全活動

全国の支社が中心となり「九十九の森（関西支社／大阪府）」「みやぎの森（東北支社／宮城県）」「きずなの森（中国支社／広島県）」などで、森林保全活動を行っています。



関西支社社員ボランティアによる森林保全活動



中国支社社員ボランティアによる森林保全活動



現地の民族衣装を着た子どもたちとの植林

中国緑化基金会との生態モデル林プロジェクト

2005～
中国

三菱商事は、中国最大のNGO団体の一つである中国緑化基金会と協力しながら、貴州省・河北省・内モンゴルなどで植林活動を実施しています。本活動は、植樹による生態環境の改善に貢献するとともに、果樹などの収穫によって貧困地域の経済の発展に寄与すること、農業支援、現地の小学生との交流を通じた教育面への支援も目的としています。また、北京・上海・広州など中国各拠点はもとより、日本からも社員がボランティアとして植樹活動に参加しています。

丸の内市民環境フォーラム

1993～
日本

三菱商事は、1993年から東京海上日動と共催で、一般の方々の環境への関心と理解を深めることを目的に、毎年「丸の内市民環境フォーラム」を開催しています。このフォーラムは、さまざまな分野の専門家が環境に関連したテーマで講演する環境入門講座で、これまでに社員をはじめ、広く一般の方々にも多数参加いただいています。



2013年度丸の内市民環境フォーラムの様子（講師：竹村真一氏）

サンゴ礁保全プロジェクト



この事業は
「国連生物多様性の10年日本委員会 (UNDB-J)」
が推奨する事業として認定を受けています。



2005～

日本・セーシェル・オーストラリア

世界各国のサンゴ礁を保全することを目指し、三菱商事は創立50周年記念事業として、2005年度に「サンゴ礁保全プロジェクト」を沖縄でスタートさせました。研究への財政的な支援とともに、社内外からボランティアを募集し、調査研究活動への参加を通じて、環境問題への理解を深めるためのプログラムも行っています。

2006年度からは、米国ミッドウェイ環礁国立自然保護区とインド洋に浮かぶいくつもの島々からなるセーシェル共和国でも研究を開始し、日本のプロジェクト同様、社内外から参加したボランティアが研究活動をサポートしています。ミッドウェイでの研究は2011年3月に終了し、オーストラリアのグレートバリアリーフで新しいプロジェクトを開始。現在は、沖縄・セーシェル・オーストラリアの3拠点を中心に、さまざまな角度からサンゴ礁保全のための研究を展開しています。

沖縄県本部町瀬底にある琉球大学熱帯生物園研究センターでは、サンゴ礁研究の第一人者である静岡大学創造科学技術大学院の鈴木^{よしみ}款教授の指導の下、サンゴの白化現象に着目した研究が行われています。この研究への継続的な支援が評価され、当社は2008年度に日本政府より紺綬褒章を受章。また、その研究内容をまとめた論文が、2012年に国際サンゴ礁学会から最優秀論文賞を受賞しました。



沖縄での調査の様子



セーシールのプロジェクトメンバー

各地のプロジェクト紹介



【沖縄】

サンゴの白化現象の原因とメカニズムの解明、サンゴ礁の健全性保持および白化回復技術の確立・普及のための研究を実施しています。年に2回社内外から各10名のボランティアを派遣するプログラムを開催しています。

【セーシェル】

キュリーズ島でさまざまなサンゴ礁の生態や環境ストレスに対する反応について研究・調査活動を実施しています。

【オーストラリア】

グレートバリアリーフで季節変動、光、温度や水質が、サンゴの黒帯病にどのような影響を与えるのかを評価しています。



“産・学・民”で研究成果を共有

よしみ
鈴木 款 博士

静岡大学創造科学技術大学院特任教授

2011年海洋立国功労者（内閣総理大臣表彰）

2005年にスタートしたサンゴ礁保全プロジェクトの科学的特徴は、サンゴの白化の原因をこれまでの常識にとらわれず明らかにしていこうという点。そしてもう一つのユニークな点が、研究者だけではなく市民と企業にも参加していただき、“産・学・民”で成果を共有しようという点です。三菱商事の社員の皆さんにも、実際に研究活動に参加いただいています。自然科学で得たものは、そこに暮らすすべての人に返していかなければなりません。本プロジェクトの成果が、多くの人々の力や喜びになるよう、これからも継続的な活動を期待しています。



福祉

障がい者が仕事を通じて「社会への完全参加と平等」を実現するための自立支援は三菱商事の社会貢献活動の根幹を成しています。

また、多くの児童養護、母子支援の団体・施設と協働して、さまざまな社会福祉活動における取り組みを行っています。

人と人、こころとこころの 触れ合いを大切に



お互いを思いやり成長していく場

小島 セツ子さん 東京都社会福祉協議会特別研究員

1974年に始まった「母と子の自然教室」は、今や40年もの歴史を誇り、首都圏のひとり親家庭にとって、なくてはならない活動として定着しました。開始以来、毎年参加してきた私にとっては大変感慨深い思いがあります。また、三菱商事の社員がボランティアとして直接参加するようになってからも30年以上が経ち、この活動をきっかけとして社内にさまざまなボランティア活動が広がっていると伺っています。開催地の方々も含め、参加者がそれぞれを思いやり、お互いに成長していく大切な場として、これからも永遠に続いていくことを願っています。





母と子の自然教室

1974～
日本

1974年から継続して開催している「母と子の自然教室」は、ひとり親家庭の母子を対象とした、人や自然との触れ合いを体験するキャンプです。春は岐阜県郡上郡明方村(当時)、夏は長野県北安曇郡白馬村飯森でスタートしましたが、その後、春は1978年から東京都内の養護施設の児童を招待する「春の自然教室」(～1999年)に移行。夏は、1983年に群馬県利根郡水上町大穴、1985年からは新潟県南魚沼市吉里に場所を移し継続してきました。

子どもたちには、自然の中で、のびのびと遊んでもらうこと、お母さんたちには普段の仕事や家事を忘れキャンプを楽しんでもらうこと、母親同士のネットワークづくりをしてもらうことを目的に、山歩きや水遊び、キャンプファイアーなどさまざまなプログラムが行われます。社員ボランティアが何カ月にもわたってミーティング

とトレーニングを重ね、参加した母子と一緒に自分たちの手でキャンプをつくり上げることが、このプログラムの大きな特徴。社員ボランティアは日頃の名前や役職を忘れ、子どもたちと身近に接するために、それぞれキャンプネーム(キャンプ用のニックネーム)で参加します。

この活動には、2014年夏までに延べ16,845人の親子と942人の社員ボランティアが参加してきました。「継続」と「社員参加」をモットーとする三菱商事の社会貢献活動を代表する活動の一つです。



大分国際車いすマラソン大会



1991～
日本

三菱商事は、1981年の国際障害者年を記念して開始された「大分国際車いすマラソン大会」(主催:大分県ほか)に1991年から協賛しています。この大会は、世界最大の規模とレベルを誇る障がい者スポーツ競技会の一つです。

三菱商事では、障がい者の社会参加が促進され、障がいに対する人々の理解が深まるとともに友情の輪が世界中に広がっていくことを願い、社員ボランティアが毎年参加、会場設営準備や選手のケアなど、レースの運営に協力しています。



博物館・美術館プログラム



2005～
日本

三菱商事は、各博物館・美術館と協働で、障がいを持つ方々に、閉館後の貸し切りの館内で展示を楽しんでいただくプログラムを開催しています。社員ボランティアのサポートの下、2005年11月から2015年1月までに東京国立博物館、国立西洋美術館、国立科学博物館、科学技術館などで67回開催、延べ1万人以上の方々に来場いただいています。

YMCAインターナショナル チャリティーラン



2008～
日本

障がいのある子どもたちを支援するとともに、障がいへの社会的な理解と関心を高めることを目的としたチャリティーランで、三菱商事はこの趣旨に賛同し2008年より本大会のオフィシャルスポンサーをつとめるとともに、グループ会社を含む多くの社員が、ランナーや運営ボランティアとして協力しています。集まった支援金はYMCAが行う障がいを持つ子どもたちを対象としたキャンプなど、野外活動プログラムに活用されます。



重度障がい者の職能開発支援 「東京コロニー」「三菱商事太陽」



1979～
日本

三菱商事は、1979年に社会福祉法人「東京コロニー」宛てにIT事業訓練用のパソコンを寄贈したほか、1993年から、同社の重度身体障がい者在宅パソコン講習事業に対する支援を継続しています。

また1979年から支援を行ってきた社会福祉法人「太陽の家」との共同出資で、1983年に「三菱商事太陽株式会社」を設立。コンピューターによる情報処理、マルチメディア・コンテンツの制作、オンデマンド印刷などの事業を行っています。



グリーンリボン ランニング フェスティバル



2006～
日本

「グリーンリボン ランニング フェスティバル」は、臓器移植を受けた方たちをはじめ、障がいを持つ方や一般ランナーの方がともに走ることで、交流を深めながら生命や健康の大切さを知ってもらうことを目的に2006年から開催されており、三菱商事はこの大会の主旨に賛同し、開催当初より協賛。グループ会社を含む多くの社員が、ランナーや運営ボランティアとして協力しています。

東京YMCA 「秋の山中湖キャンプ」



2003～
日本

東京YMCAが企画・運営するLD(学習障がい)児を対象とした野外キャンプ活動を協働プログラムとして三菱商事が助成。毎回社員もボランティアでキャンプリーダーとして参加しています。このキャンプを通じ、子どもたちがさまざまな活動にチャレンジし自分に自信をつけ、仲間と助け合うことによりコミュニケーション能力を高めることを目的としています。



サッカースクール (FC東京／ベガルタ仙台)



2002～
日本

東京都内と仙台市内の児童養護施設と母子支援施設の子どもたちを対象に、プロサッカークラブのFC東京とベガルタ仙台のコーチ指導の下、サッカースクールを年2回ほど開催しており、毎年約200名の子どもたちが参加しています。社員ボランティアも受付やグラウンド整備、ミニゲームへの参加などでイベント運営をサポートしています。

教育

青少年の育成と次世代のリーダーを育てることを目的とした
さまざまな教育分野での支援を実施しています。

また、国内・海外において奨学金制度を
実施しています。

MC International Scholarship

2000～
世界各国

三菱商事では、海外各地の大学で学ぶ現地の学生に
対して、2000年度から奨学金を支給しています。2014
年度までに5,821名の学生に奨学金を支給しました。



2014年度交流会(旧岩崎邸訪問の様子)

三菱商事留学生奨学金

1991～
日本

三菱商事では1991年から、世界でリーダーとして活躍が期待される
優秀な外国人留学生を支援することを目的とした奨学金制度を設けて
います。2008年からは規模を大幅に拡大し、毎年約100名の学生に対して
奨学金を支給、2014年までに1,007名の学生に奨学金を支給しました。
また、奨学生と社員との交流会やボランティア活動も実施しています。

奨学生として得た3つの宝物を大切に

ショフル・ナリントヤさん 2012・2013年度 三菱商事留学生奨学金受給者
(新疆ウイグル自治区出身 東京外国語大学・大学院卒業)

三菱商事留学生奨学金を受給したことで、学習・研究・教育実習に専念しながら、さまざまな国際
交流イベントやボランティア活動も経験することができました。故郷の家族とともに感謝の気持ちで
いっぱいです。日本における青春の舞台で得た宝物は、「お世話になった日本への恩・絆を大切にす
ること」「夢のために最後まで精一杯努力すること」「初心と感謝の気持ちを忘れないこと」です。これ
からも、その宝物を大切にしながら、グローバル・ビジネスに要求される言語応用力をステップ
アップし、異文化圏のビジネスシーンに対応できるように、パフォーマンスとスキルを発揮していきます。





小学校修復プロジェクト



2008～
南アフリカ共和国

三菱商事の子会社であるHernic社の地域貢献活動に協力し、近隣の公立小学校、障がい者学校の校舎修復や、老朽化した車いす用スクールバス買い替えなどの支援を行っています。Hernic社は、社会貢献の一環として地域貢献施策を推進しており、地域住民やパートナー、ステークホルダー、従業員などに配慮したバランス経営を行っています。支援先となる学校は、Hernic社従業員の居住区にあり、こうした設備の寄贈、教育環境の改善は、学校に通う子どもたちはもちろん、周囲の家族にとっても明るい光となり、地域環境の改善に貢献しています。

米国コロンビア大学公共政策大学院(SIPA) 三菱商事フェローシッププログラム



2014～
米国

三菱商事では、2014年からコロンビア大学国際公共政策大学院(SIPA)で学んでいる優秀な大学院生に対し、将来の社会課題を解決するためのリーダーの育成を目的とした奨学金を支給するための基金を設置しました。2014年度から毎年数名の院生に対して奨学金を支給。今後も基金を通じて継続的に支援していきます。



2014年度授与式の様子

えほんのがっこう



1991～
日本

三菱商事では、絵本の製作支援や読み聞かせの活動の支援などを通じて、子どもたちが絵本と親しむ機会を提供しています。絵本の読み聞かせとキャラバンカーに積んだ絵本の自由閲覧という、講談社主催の「おはなし隊」に協賛しているほか、社員が昼休みを利用して、日本の絵本に現地語の翻訳シールを貼り、カンボジア・ラオスなど、アジアの子どもたちへ届けるボランティア活動を行っています。



国際交流・貢献

グローバルな総合事業会社として、三菱商事がビジネスを展開する国や地域に、中長期的にどのようなサポートができるかを考え、現地の人々のニーズに合った国際貢献施策をはじめ、各拠点でさまざまな社会貢献活動を実施しています。

日本とケニアの子どもたちをつなぐ架け橋

スマイル アフリカプロジェクト



2009～
日本

雑誌「ソトコト」が2009年に始めた、使用済みのまだ履ける運動靴を国内で回収し、裸足での生活を余儀なくされているアフリカの子どもたちに届ける活動に、三菱商事は開始当初から協力しています。

三菱商事ビル1階のMC FORESTほかで回収したシューズは、2013年には1,000足に達し、それらのシューズが、現地でどのように寄贈され活用されているかを紹介する写真展をMC FORESTにて開催しました。会場では、高橋尚子さんからシューズを受け取り喜ぶケニアの子どもたちの笑顔や、日本での回収活動の様子も紹介されました。





ビジターセンター外観

ンゴロンゴロ自然保護区 ビジターセンター 改修プロジェクト



2009～
タンザニア

“アフリカ自然保護区の至宝”として世界遺産にも登録されているンゴロンゴロ自然保護区の入口にある「ビジターセンター」は、年間46万人以上の観光客を受け入れる施設です。1989年の建設以来改修が行われず老朽化が進んでいた同施設を、新たなシンボルとして生まれ変わらせるべく、改修を行いました。

はばたけ21 未来の子どもたちへ



1992～
日本

1992年に新潟市の姉妹都市であるロシアのハバロフスクとウラジオストクの子どもたちを新潟に招待して始まった、三菱商事新潟支店の国際交流活動で、今では中国と韓国も加わり4カ国の子どもたちの交流となっています。社員もボランティアとして数多く参加しています。



妙高高原にて



リハビリ機器を寄贈

台北市立陽明教養院への 支援



2005～
台湾

台北市政府社会局が運営する台北市最大の知的障がい者養護施設「台北市立陽明教養院」を、2005年から継続して支援しています。施設の設備改善、介護バス・貨物トラックの寄贈、機器購入など、施設が必要とする幅広い支援を毎年行っています。

一足の靴が一人の命を救う

高橋 尚子 さん シドニー五輪女子マラソン金メダリスト

このスマイル アフリカ プロジェクトに参加する前から、世界には靴を履くことができない子どもたちがいるということは知っていました。そんな子に靴を渡したら、喜んで走り回るのだろうと単純に考えていたのですが、実際にケニアに行ってみて、自分の甘さに気付かされました。裸足で遊ぶことで、ほんの小さな切り傷や擦り傷で感染症にかかってしまう子がたくさんいるのです。一足の靴が一人の命を救う。そしてその靴は、日本の子どもたちとケニアの子どもたちをつなぐ、国際交流の大切な架け橋となっています。三菱商事の皆さんからも、1,000足を超える靴を寄贈していただきました。これからも一緒にこの活動を長く続けていきましょう。





完成した太陽光発電設備

ペトラ遺跡での 太陽光発電支援



2011～
ヨルダン

ユネスコ世界遺産であるペトラ遺跡内の電力供給源となる太陽光発電設備(250kW)設置の支援を行っています。ペトラ遺跡は、260kmにわたる貴重な世界遺産ですが、同遺跡で使用する電気はディーゼル発電に頼っており、排気ガスや騒音による環境問題の懸念が生じていました。当プロジェクトは、ディーゼル発電からクリーンエネルギーである太陽光発電へ転換することにより、遺跡の環境保護を目指すものです。インバータ、モジュール、スイッチボードなどの設置が2012年9月に完成し、国王主催の完成式典が行われました。

インド農村開発プロジェクト ～スワミナタン研究財団支援～



2006～
インド

三菱商事は、2006年3月にインド東部・オリッサ州の州都ブバネシュワールに事務所を開設したことを契機に、スワミナタン研究財団をパートナーに、インドの農村開発支援を開始しました。まず、オリッサ州コラプット地域の無電化村に太陽光で発電する外灯200基を寄贈。設置はスワミナタン研究財団を通じて行われ、地域経済の発展や治安の向上にも役立ちました。その後も、人材開発センターの建設、農業支援活動、灌漑設備の設置など、自然や文化を守りながら地域の持続可能な開発を継続的に支援しています。こうした活動が、インドのNGO団体である農業・農村開発センターより高く評価され、2013年度CSR Leadership Awardを受賞しました。



野菜を収穫する現地の人々



人材開発センター



農業研修の様子

小規模農家自立支援



2009～
ブラジル

ブラジル・バイア州南部の環境保護地域における小規模農家の自立支援活動に協力しています。この活動は、米州開発銀行との間で締結した「中南米に於けるCSR活動の協力に関する覚書」に基づく第一号案件。ブラジルのオデブレヒト財団と提携して進めているもので、青少年向けの農業訓練校、農林業技術校への運営支援を通して、自然を守りながら農産物を生産・販売する技術を伝えています。

三菱商事米州財団 (MCFA)



1991～
米国

三菱商事米州財団(MCFA:Mitsubishi Corporation Foundation for the Americas)は、米国三菱商事が三菱商事とともに設立した、米州の社会問題の解決に寄与するための財団です。

MCFAのミッションは、私たちが生活する環境の物理的・社会的側面の両方を取り巻く、環境保全活動・環境教育を米州全体で推進することで、設立以来860万米ドル(約10億円)の資金援助を行っています。

現在の活動には、ブラジル・ペルーのアマゾン川流域における野生生物保護協会(Wildlife Conservation Society:WCS)の環境保護活動に対する支援や、農村の開発を目指す非営利の社会投資ファンド「ルートキャピタル」を通じた、南米の小規模農家の支援などがあります。



エコツアーの様子 ©Rainforest Alliance



アーティチョークの収穫 ©Root Capital



アルゼンチン(パタゴニア)のペンギン
©Wildlife Conservation Society



水質調査の様子 ©Earthwatch Institute



WaterAidの提供する安全な飲み水を運ぶ人々 ©WaterAid

三菱商事 欧州アフリカ基金 (MCFEA)



1992～
英国

三菱商事欧州アフリカ基金(MCFEA:Mitsubishi Corporation Fund for Europe and Africa)は1992年、三菱商事と英国三菱商事会社(当時)が設立し、英国で登録された基金です。設立以来、MCFEAはさまざまな団体を通して欧州やアフリカの環境および開発プロジェクトに360万ポンド(約6億4,000万円)以上の資金援助を行っています。支援は、Earthwatch Institute、SolarAid、Farm Africa、BirdLife Internationalなど多岐にわたるパートナー組織を通じて行われています。その一つ、NGOのWaterAidは、世界の最も貧困な人々に安全な水と衛生を届けることで、健康や生活の質向上に大きく貢献しています。



BirdLife Internationalの野鳥観察
©BirdLife International

文化・芸術

博物館への支援など、文化・芸術関連のメセナ活動を
広く行っています。また、新しい社会貢献活動として、
将来性のある若手アーティストの支援も積極的に実施しています。

チャリティー・オークションの売上で アーティストのキャリアをサポート

三菱商事 アート・ゲート・プログラム

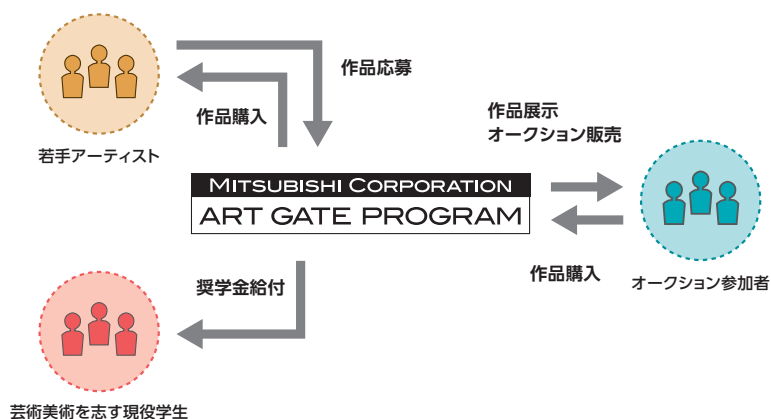


2008～
日本

三菱商事が企業の社会貢献として取り組んでいる、
プロのアーティストを志す方々へのキャリア支援プロ
グラムです。

日本の芸術系大学生およびその卒業生は、一般的に
作品発表の機会に恵まれないという現状があります。
2008年にスタートした本プログラムでは、学校卒業後
3年未満の若手アーティストによる作品を公募し、年間
約200点を1点10万円で三菱商事が購入。社内外に
展示した後、その作品を一般参加のオークションで
販売し、その売上を奨学金として給付することで、若手
アーティストの育成とキャリア支援を目指しています。

2014年12月までに行われた25回の展示とチャリティー・
オークションを通じ、多くのアーティストが個展開催の
機会を得たり、コレクターから新規の制作依頼を受けたりと、
まさに「ゲート」にふさわしい取り組みとなっています。





©Michiko Yamamoto

はじめてのクラシック

2007～
日本

クラシック音楽を生演奏で聞く機会が少ない中学生や高校生を対象に、本格的なホールでのコンサートを楽しんでもらう企画です。三菱商事は、初めての時こそ一流の音楽に触れてほしいとの思いの下、2007年の企画開始当初から支援しています。

西オーストラリア州交響楽団 (WASO) 活動支援

2008～
オーストラリア

国際的にも高い評価を得て、地域を代表する文化芸術団体として注目度が高い、「西オーストラリア州交響楽団 (West Australia Symphony Orchestra = WASO)」の活動を支援しています。



大英博物館 「日本ギャラリー」支援

2008～
英国

大英博物館と10年契約を結び、企業として初めて日本文化を紹介する常設展示室「日本ギャラリー」の単独スポンサーをつとめています。この展示室は、古墳の埴輪から現代の漫画まで約300点を展示するなど膨大な日本関連コレクションを展示しており、その規模は欧州最大。日本の過去と現在の姿を伝える同ギャラリーを支えることで、欧州における日本文化の発信に寄与しています。

バルドー博物館支援

2008～
チュニジア

バルドー博物館は、ユネスコ文化遺産でもある古代カルタゴ遺跡や、古代ギリシャ・ローマ時代の遺跡から発掘された出土品やモザイク画などを数多く所蔵する、考古学的に価値が高い博物館。これまでにトラック、パソコン、大型スクリーン、TV会議用視聴覚機材などを寄贈し、博物館を訪れる観光客や研究者に利用されています。



芸術家としての活動の重要な足がかりに

井上 菜恵子 さん 三菱商事アート・ゲート・プログラム2009年度奨学生

学生時代に三菱商事アート・ゲート・プログラム奨学生の第一期生として選んでいただき、学費や制作費に困ることなく学業に専念することができました。またチャリティー・オークションではたくさんのお客さまや作家の方々と出会い、作品制作や、また美術に対して深く考えるきっかけになりました。卒業後は東京藝術大学で教育研究助手を3年間勤め、現在は非常勤講師として勤務し作品制作も続けています。毎年、さまざまな展示の機会を与えていただき、今こうして作家として充実した日々をおくっていけるのも、三菱商事アート・ゲート・プログラムのおかげです。ありがとうございました。



東日本大震災復興支援

三菱商事は、東日本大震災発生直後から復興支援活動を行い、
学生支援奨学金と復興支援助成金の活動に加え、
産業復興・雇用創出に寄与することを目的とした
支援活動にも取り組んでいます。

ともに、前へ。
ともに、明日へ。

学生支援 奨学金

被災により修学が困難になった学生に対して、これまで3,695人に対して学生奨学金を給付して支援しています。

復興支援 助成金

被災地で復興支援に携わるNPOや社会福祉法人などをサポート。公募によって選ばれた232の団体に対して助成金を支給しました。

その他 各種支援

被災地や被災された方々を支援する活動への寄附や、物資・機器の提供などを通じ、さまざまな形で復興を支援しています。

- ・被災地を巡る移動美容室を寄贈
- ・海上給油施設を無償貸与
- ・復興を後押しする「お祭り」支援
- ・「フレンドシップキャンプ」を日本YMCA同盟と協働で実施



キャピタルホテル1000(岩手県陸前高田市)



キャニオンワークス(縫製加工/福島県浪江町)



みちさき(農業/宮城県仙台市)



南相馬ソーラー・アグリパーク(体験学習施設/福島県南相馬市)

産業復興・雇用創出支援

2012年3月、「三菱商事 東日本大震災復興支援基金」の一部を拠出する形で、「三菱商事復興支援財団」を設立(5月に公益財団法人に認定)。被災地の力強い復興のためには、「産業復興・雇用創出」が不可欠と考え、注力しています。水産業や農業など、これまで地域を支えてきた産業の再生支援を行うとともに、これまでに水産加工、ホテル再建、サービス、サービス付高齢者住宅、畜産飼料製造、造船、体験学習施設など44社(岩手県14社、宮城県21社、福島県9社)へ合計約20億円の投融資を行っています(2015年1月現在)。

ボランティア活動

「実際に被災地で支援を手伝いたい」との多くの社員の声を受け、震災直後からグループ会社を含む社員ボランティアの活動を継続しています。これまでに約3,529名(内、グループ会社73社985名)の社員(2014年12月末現在)が、さまざまな復興支援活動に協力しています。活動の内容も、がれきや土砂の撤去、農地の整備、漁具の補修、廃校の再生、地元のイベントのお手伝いなど多岐にわたっています。

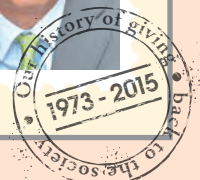


WhatではなくWhyを大切に

末吉 竹二郎さん

国連環境計画金融イニシアティブ特別顧問
三菱商事 環境・CSRアドバイザリーコミッティーメンバー

社会貢献活動にとって「継続性」は重要なポイントの一つ。その場限りの「イベント」ではなく、社員の世代交代の中で引き継ぎ成長させていく「カルチャー」となるべきで、それには「何をするのか」ではなく「なぜするのか」ということを十分に議論する必要があります。「What」ではなく「Why」が重要なのです。三菱商事の東日本大震災に対する復興支援活動を見ると、「Why」を大切にしながら続けてきたことがよくわかります。この思考・行動パターンはビジネスにおいても必要。三菱商事にはそうした意欲が非常に高い人たちが集まっていると思っています。発足60周年に当たり打ち出した「障がい者スポーツ支援」においても、継続的な活動を育てていただきたいと思います。



社員ボランティア

社員一人ひとりが社会貢献に対する意識を高めていくことが重要と考え、社員のボランティア活動への参加を促すさまざまな取り組みを進めています。

一人ひとりが 1年に1回ボランティア

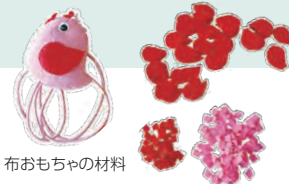


絵本製作～社内ボランティア

日本の絵本に現地語の翻訳シールを貼り、カンボジア・ラオスなど、アジアの子どもたちへ届けるボランティア活動を、2005年から継続しています。



社内ボランティア



布おもちゃの材料

社員が昼休みや就業時間後の少しの時間を利用してできるボランティアプログラムを、週に3～4回開催しています。カンボジアやラオスなどの子どもたちに向けて絵本に現地語の翻訳シールを貼る絵本製作や、障がいのある子どもたちの発達を助ける布のおもちゃ作り、使用済み切手の整理、高齢者に贈る絵手紙製作などを行っています。

■絵本製作 ■布おもちゃ製作 ■点字製作 ■エコ封筒作り ■算数教材製作 など

チャリティーバザー

夏と冬に、三菱商事ビル、丸の内パークビルのエントランスホールでチャリティーバザーを開催。NPO・NGO団体や障がい者就労支援施設、東北復興支援団体からのフェアトレード商品や雑貨、パン、お菓子、地域名産品・手工芸品などを販売しています。社員は販売補助員として参加しています。



食べて
社会貢献!

TABLE FOR TWO (TFT)

社員食堂、自動販売機で対象となる食事や飲み物を購入することで、開発途上国の子どもたちに学校給食が届けられるプログラムに協力しています。

回収プログラム

寄附活動に使えるさまざまなものを、常時回収しています。

■ペットボトルキャップ(エコキャップ) ■使用済み切手
■シューズ ■古本・CD ■外国コイン ■古着
■書き損じ年賀状/当選年賀状 ほか

【トークン制度】

社員のボランティア活動は、トークンという仮想通貨に換算(活動1回につき1トークン=500円)し、会社が福祉、教育、環境関連のNPOなどに寄附する仕組みを整備しています。トークンは会社が指定するボランティアだけではなく、社員の自発的な活動でも取得可能としています。

【ボランティアカード】

会社がサポートするボランティア活動に参加した社員には、ボランティアカードに貼るシールが渡されます。シールがたまったらカードをボランティア事務局に提出すると、カードの枚数に応じた金額が、世界の子どもたちの支援金として寄附されます。

【ボランティア休暇制度】

年間最長5日間のボランティア休暇を社員に認めています。この制度を利用して、多くの社員が「母と子の自然教室」や「熱帯林再生実験プロジェクト」「サンゴ礁保全プロジェクト」「復興支援」などの活動に参加しています。

お互いの理解を深める「場づくり」を

永島敏行さん 俳優

三菱商事とは、私がプロデュースする「青空市場」のチャリティーバザーへの出店や、復興支援イベントへの参加などを通して、お付き合いしてきました。私は「青空市場」を、生産者と消費者が対話することでお互いの理解を深める「場」として展開してきたわけですが、三菱商事のCSR活動にも、そうした「場づくり」の精神を感じます。そしてそれは、商社として培ってきた企業精神が土台になっているのだと思っています。これからもぜひ、さまざまな形でコラボレーションしていきましょう。



MC FOREST

三菱商事のCSRステーション“MC FOREST”では、
環境や社会への取り組みなど、三菱商事の
さまざまな活動を皆さまにご紹介しています。



“三菱商事の森”へようこそ



森のコースター

木製カラクリで豊かな森がえられる様子を表現。
遊んでいたただの数だけ植樹を実施しています。



サンゴの水槽

生きたサンゴの生態を間近で観察できます。



MC Global Action

大型モニターと連動したテーブル型パネルで、
三菱商事が展開する世界中のビジネスや
社会貢献活動をご紹介します。



触れる地球

地球温暖化や台風・津波が発生する様子、
渡り鳥の移動など、触って体感できる
デジタル地球儀です。



History Vision

三菱商事の創業から現在までを
俯瞰する年表を展示。タブレット端末で
詳しい歴史をお読みいただけます。

各種セミナー・ワークショップ

環境問題や社会貢献活動、障がい者支援などに取り組むNGOやNPO、研究者の方々と社員が協力して、さまざまなセミナーやイベントを開催しています。

- ・世界の子どもにワクチンを日本委員会(JVC)一活動報告
- ・美しい日本の山を科学する
- ・絶滅危惧種イヌワシについて学ぶ
- ・選ぶという海の守り方
- ・ウガンダの夢～HIVと共に生まれる
- ・NGO活動を通して見えた“タイの今” など



MC FOREST SCHOOL

2013年8月から、小学生を対象とした夏休み自由研究にも役立つ特別イベントを開催。さまざまなセミナー、ワークショップを行い、社員も講師として活躍しています。2014年からは春休み期間にも開催しています。

- ・「みんなのコンサート」0歳からのクラシック(音楽)
- ・昆虫博士になろう!(理科)
- ・サングの不思議(環境)
- ・車いすバスケットボールを体験(体育)
- ・手作りエコバッグに挑戦!(図工) など

J-WAVE「LOHAS TALK」公開収録

幅広い層に親しまれているJ-WAVE(81.3FM)のトーク番組「LOHAS TALK」(三菱商事提供)の公開収録を行っています。さまざまな分野の方をゲストに迎え、楽しくてためになるお話を伺います。



スマイル アフリカ プロジェクト写真展



モアイ展「More, More, Moai!」

CSRに関する展示

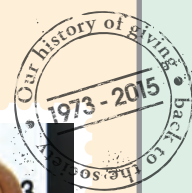
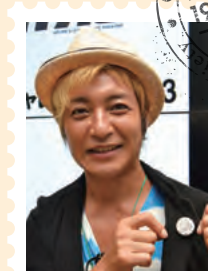
NGOやNPOによる写真展や、東日本大震災復興支援、「スマイル アフリカ プロジェクト」など三菱商事のCSR活動にかかわる展示を随時行っています。

都会の真ん中のオアシスで一緒に遊ぼう!

つるの剛士さん 俳優/ミュージシャン

MC FORESTで行われるさまざまな企画に、いつも楽しく参加させていただいています。

世の中はどんどんと便利になっていきますが、その反動として子どもたちもその親も自然に触れる機会が少なくなっているように思われます。MC FORESTは、都会の真ん中にあるオアシスのような場所。それも、世の中を便利にするために日夜尽くしている三菱商事が運営していることに、大きな意味があると思います。自然の中での遊びは、人間にとって五感をフルに活用する大切な営みです。これからも、MC FORESTを基地として、子どもたちが自然に触れ合う機会をつくっていただきたいと思います。もちろん私も喜んで協力させていただきます。



環境保全を願う思いが 結んだ絆

現地の方々と友好的な雰囲気の中で植樹することができたのは、環境保全を願う活動で培われた信頼関係の賜物。環境保全を考える機会になり、楽しい思い出にもなりました。



現地の方々との 楽しい交流

植樹祭だけでなく、現地の皆さんとの交流など、盛りだくさんの企画をありがとうございました。小学校訪問で出会った子どもたちと将来再会したいです。

熱帯林再生実験 プロジェクト

熱帯林の短期再生を目指す実験プロジェクト。その成果を観察し、自ら植樹を行うエコツアーに社員も参加しています。



博物館・美術館プログラム

さまざまな博物館・美術館と協働で、障がいを持つ方々に、閉館後の館内で観賞を楽しんでいただいています。社員ボランティアがサポートを行っています。

自分の経験を周りにも広めたい

閉館後の館内は、ゆっくりとしたひとときを過ごすことができます。普段、混雑の中での観賞が難しい方々にこういう場を提供できるのは、大変うれしく思います。

ボラン 参加し

さまざまなボランテ
三菱商事グルー
ご紹介い

“おじさん”だからこそ できる役割も

子育てを経験した世代だからこそその役割があります。おじさん世代にこそ、社会貢献活動の精神と新しい仲間との素晴らしい出会いを味わってほしいです。



母と子の自然教室

ひとり親家庭の母子を対象としたキャンプ。毎年約50名の社員ボランティアが参加しています。

かかわるすべての人から 大切なものをもらいました

一緒に活動した人たちからはエネルギーを、吉里の方々からは温かさをお母さんたちからは人間力を、子どもたちからは忘れていた純粋さをもらいました。

社会を変えていく最先端の企業に

岡田 武史 さん

元サッカー日本代表監督
三菱商事 環境・CSRアドバイザリーコミッティーメンバー



東日本大震災発生直後、環境・CSRアドバイザリーコミッティーのメンバーとして緊急会議に出席した際、議論の主眼が、「どんな活動を何年続けるか」「何年後かに必要となる活動は」という長期的活動目標に置かれていたことに驚かされました。そうした会社の姿勢がしっかりと社員に伝わり、今も変わらず社員ボランティアが継続していることを考えると、三菱商事の社会貢献に対する「本気度」を感じます。三菱商事には、常に社会貢献活動を牽引する企業であってほしいと願う一方、「母と子の自然教室」などに参加し、社員の皆さんの積極的なボランティア活動に接するたびに、それは確実に実行されるだろうということを確認しています。



三菱商事YMCA フレンドシップキャンプ

東日本大震災復興支援活動の一つとして、被災した子どもと家族のためのキャンプを、これまで50回以上実施してきました。社員もボランティアとして数多く参加しています。

子どもたちの笑顔に再会したい

印象に残っているのは子どもたちのエネルギー。普段外で遊ぶことを制限されているせいか、朝から暗くなるまで元気に遊んでいました。そんな子どもたちの笑顔にまた再会したいです。

今からでも遅くはない!

初めて参加して「ボランティア参加に遅いことはないんだ」と再認識。実体験を通じて感じることで、学ぶこと、さまざまに考えさせられます。



東日本大震災 復興支援活動

これまでに延べ約3,500名もの社員が、現地でさまざまな復興支援活動に協力しています。

わずかでも被災地復興の役に

作業中、通りかかった年配のご夫婦が私たちに深く頭を下げていたそうです。「微力ながら地域の役に立っている」という実感が込み上げ、メンバー同士で涙ぐみました。

ティアに ました!

ティア活動に参加した
社員の感想を
たします。



社内ボランティア活動

昼休みなどを利用して

社員が気軽に参加できるボランティアプログラムを、週に3~4回開催しています。

お昼休みに気軽にボランティア

お昼休みにもさまざまなボランティアプログラムがあり、楽しく参加しています。完成した作品が多くの場所で活用いただけると考えるととてもうれしいです。

小さな力を^{たすき}でつなぐ

チームで力をつなぎ、ゴールを目指すことこそ、普段私たちが心がけるべきことだと実感。自分の小さな力が少しでも社会貢献につながれば…。



YMCAインターナショナル チャリティーラン

障がいを持つ子どもたちの野外活動への支援を目的に実施されるチャリティーラン。毎年全国で多くの社員が、ランナーや運営ボランティアとして協力しています。

自分の経験を周りにも広めたい

サンゴの生態が私たちの日常にいろいろかわっていることを知りました。今回の経験を、周りの人たちにお話して、理解を深めるように働きかけたいです。



サンゴ礁保全プロジェクト

サンゴ礁保全のための研究プロジェクト。
調査・研究活動のサポートとして
社員ボランティアが参加しています。

思い出のサンゴ礁を 守りたい!

以前訪れたカンクン、グレートバリアリーフ、パラオなどの美しいサンゴ礁に大きな被害が出ているとのニュースを聞き心を痛めていたので、この調査に参加することができ大変有意義でした。

地図で見る 社会貢献活動



大英博物館「日本ギャラリー」支援

2008～ 英国



10年間にわたって「日本ギャラリー」を
スポンサー。欧州と日本の友好関係の
構築や日本文化の発信に貢献



インド農村開発プロジェクト ～スワミナタン研究財団支援～

2006～ インド



財団と共に少数民族コミュニティの
経済的自立を支援



中国緑化基金会との 生態モデル林プロジェクト

2005～ 中国



植林活動により生態環境の改善、
貧困地域の経済の発展に寄与



バルドー博物館支援

2008～ チュニア



トラック、パソコン、視聴覚機材などを寄贈



ペトラ遺跡での 太陽光発電支援

2011～ ヨルダン



ユネスコ世界遺産の
設備設置の支援



台北市立陽明教養院

2005～ 台湾



知的障がい者養護施設を



ンゴロンゴロ自然保護区 ビジターセンター改修プロジェクト

2009～ タンザニア



世界遺産に登録される自然保護区の
ビジターセンターを改修



三菱商事欧州アフリカ基金 (MCFEA)

1992～ 欧州・アフリカ

さまざまな団体を通して環境保全、環境教育、
貧困撲滅などに貢献

・ Earthwatch Institute ・ SolarAid ・ Farm Africa
・ BirdLife International ・ WaterAidなど



小学校修復プロジェクト

2008～ 南アフリカ



Hernic社と共に近隣の小学校を整備



西オーストラリア州 交響楽団活動支援

2008～ オーストラリア



西豪州を代表する文化芸術団体の
活動を支援



三菱商事米州財団 (MCFA)

1991～ 米州

環境保全活動・環境教育を米州全体で推進するための支援
・野生生物保護協会・ルートキャピタルなど



熱帯林再生実験プロジェクト



1990～ マレーシア・ブラジル・ケニア・インドネシア
現地固有の植物を密植・混植方式で植林し、
熱帯林の短期再生を目指す



米コロンビア大学公共政策大学院 (SIPA) 三菱商事フェローシッププログラム

2014～ 米国

将来のリーダー育成を目的とした基金を設置

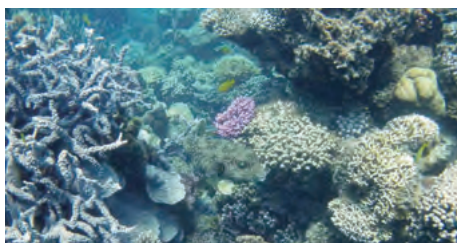


小規模農家自立支援



2009～ ブラジル

青少年向けの農業訓練校の運営を通して、
自然環境を保護しながら生計を立てる技術を指導



サンゴ礁保全プロジェクト



2005～ 沖縄・セーシェル・オーストラリア
3拠点で、さまざまな角度から
サンゴ礁保全のための研究を展開

※日本を除く



地球環境



福祉



教育



文化・芸術



国際交流・支援

数字で見る 社会貢献活動

これまでの活動を数字で表しました。

トークン数

73,290 トークン

(2014年12月末時点)

社員のボランティア活動を、トークンという仮想通貨に換算（活動1回につき1トークン=500円）し、会社が福祉、教育、環境関連のNPOや財団に寄附する仕組みを整備しています。

ボランティアカード

9,194枚

(2014年12月末時点)

三菱商事主催のボランティア活動に参加した社員に配られるシールを貯めたボランティアカードを集計し、毎年NPOや財団などに寄附を行っています。

奨学金を給付した学生数

10,815名

(2014年12月末時点)

MC International Scholarship

5,821名

(2014年12月末時点)

三菱商事留学生奨学金

1,007名

(2014年12月末時点)

復興支援奨学金

3,695名

(2014年12月末時点)

三菱商事アート・ゲート・プログラム奨学金

76名

(2014年8月末時点)

ダルニー奨学金※

216名

(2014年3月末時点)

※ボランティアカードの寄附により、公益財団法人国際センターを通じて奨学金を提供しているもの

熱帯林の植樹本数

1,139,620本

(2014年12月末時点)

博物館・美術館プログラムの観覧者数

11,109名

(2015年1月末時点)

MC FOREST来場者数

76,425名

(2014年12月末時点)

TABLE FOR TWO 寄附実績

150,103食

(2014年12月末時点)

スマイル アフリカ プロジェクト
回収シューズ数

1,370足

(2015年1月末時点)

ペットボトルのキャップ、
ボランティアカードなどによる
ワクチン寄附本数

99,149本

(2014年12月末時点)

翻訳絵本の寄附冊数

20,220冊

(2014年12月末時点)

母と子の自然教室参加者数

母子 16,845名

社員ボランティア 942名

(2014年12月末時点)

三菱商事アート・ゲート・プログラム
購入作品数

1,443点

(2015年1月末時点)

これまでに支援した国・地域数

80カ国・地域

(2014年12月末時点)

歴史で見る社会貢献活動

SINCE 1974

【第1事業:生命】 人工臓器の研究・開発

三菱商事の社会貢献・第1事業は、尊い「生命」にかかわる「人工臓器の改良・開発」の研究でした。人工臓器は、肺や腎臓のように本来人間の体に備わっている器官の代わりとして、同じ働きを果たすよう人工的に造られたもので、手術の際などに使用されます。しかし、1970年代初頭はまだ十分な開発がされておらず、心臓手術などで使われる人工肺の使用可能時間は約2時間が限度で、より長時間を要する手術には使用できないなど、実用化には至っていませんでした。そこで、三菱商事は1974年3月、「日本人工臓器開発研究所」を設立し、世界でもトップレベルにある米国・クリーブランド・クリニックの協力を得て、人工肺の改良・開発への挑戦を始めました。その結果1978年には、7～8時間の開心手術も安全に行える「膜型人工肺」の開発に成功、当時としては画期的な成果をあげました。

三菱商事が資金を負担し、クリーブランド・クリニック人工臓器研究所が開発した膜型人工肺のpatentは、本来三菱商事に帰属



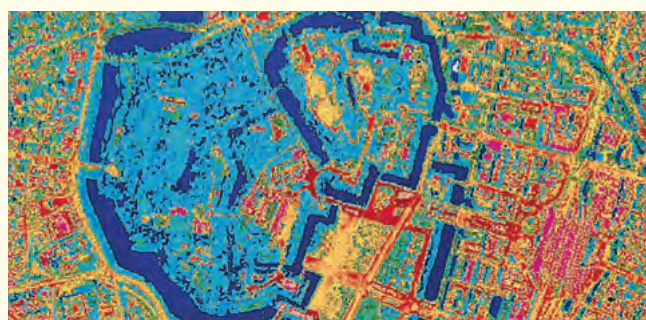
するものでしたが、これを米国に設立された財団法人「人工臓器日本基金」に寄贈しました。そして同財団では、膜型人工肺にかかわるpatentの使用許可を世界各国の医療機器メーカーに与え、その使用料を財源として、さらに人工臓器の研究と開発を推進しました。
⇒1979年3月終結

【第2事業:環境】 リモート・センシング

自然環境や限りある資源を守るため、第2事業は、「リモート・センシング技術」の研究・開発を実施しました。リモート・センシングは、1972年、米国が世界初の地球観測衛星「ランドサット」を打ち上げ、宇宙から地球を調査したデータが利用できるようになったのを機に、注目され始めました。

日本は米国と違い、山が多く海に囲まれた細長い国土であるために、わが国独自のリモート・センシングの技術開発が必要でした。そこで三菱商事は、1975年7月、三井物産、科学技術庁(当時)などとともに、財団法人「リモート・センシング技術センター」を設立、日本の実情に合った「航空機によるリモート・センシング技術」の開発に尽力しました。

1977年8月7日に起こった有珠山大噴火は、大量の降灰や地殻変動による家屋の倒壊・道路の寸断など、周辺に大きな被害をもたらしました。このとき三菱商事は、噴火中の有珠山上空に航空機を



飛ばしリモート・センシングによる調査を実施、その後の噴火予知や災害対策に大いに貢献しました。このほか、滋賀県・琵琶湖の湖流調査、東京の環境調査、多摩川の流域開発に伴う汚染と洪水対策調査、南九州地区の熱資源調査、富山湾に流出する河川水調査などを手掛けて、調査結果やデータを学会などで発表、大きな成果をあげました。⇒1988年3月終結

三菱商事は1974年、人間にとって大切な“生命”“環境”そして“こころ”にかかわる3つの事業をスタートさせました。その後、1979年には第4の事業として、社会的関心が高まりつつあった“福祉”にかかわる活動を開始、

収益につながるかどうかとは関係なく、これらの事業を社会的経費として負担すべきものであると考え、展開してきました。この4つの事業が、現在の社会貢献活動の基礎となっています。

【第3事業:こころ】 母と子の自然教室

こころを豊かにすることを目的に、三菱商事は第3事業として、母と子に自然の中で人間と人間、自然と人間との触れ合いを体験していただく「母と子の自然教室」を実施してきました。

今から40年前、世の中は高度成長期で経済発展が進む一方、精神的な面では何か大切なものを失いかけているような実感がありました。かつて、子どもたちが自然の中で無心に遊び戯れることで豊かな想像力を育み、大人たちも暮らしの知恵や手づくりを大切にしてきたことをこの自然教室で体験し、「本当の豊かな社会とは、こころと物のバランスが取れた社会なのだ」ということを実感してもらおう、との思いから1974年5月にスタートしました。

自然教室では、東京都内に住むひとり親家庭を対象に(開始当初は母子家庭と一般家庭)、素朴な自然の中で、野菜の収穫、ハイキング、草花遊び、竹細工などの手作り教室、キャンプファイアーなどをしながら社員ボランティアとともに3日間を過ごします。活動に



かかる諸経費はすべて三菱商事が負担し、参加者はこの40年間で16,845名にも及びました。

1990年には、継続性、テーマ、社員参加が高く評価されて厚生大臣より表彰を受けました。毎年100名以上の母と子が参加し、さまざまなプログラムを通じて、自然との触れ合いを体験しています。
⇒継続中

【第4事業:福祉】 重度身体障がい者の職能開発

第4事業は、障がい者が社会に出て働く能力を身に付け、たくましく自立していくことを支援する「福祉」にかかわる活動です。

三菱商事は、重度身体障がい者の方々も健常者と同じように働くことのできる社会こそが豊かな住みよい社会である、と考えています。そのような社会の実現を積極的に支援するため、まず1979年に、社会福祉法人「東京コロニー」と「太陽の家」(大分県別府市)に訓練用コンピューターを寄贈しました。さらに、これを単なる寄附行為だけで終わらせず、障がい者がプログラマーとして職業的に自立するための訓練と環境づくりに着手。1980年には太陽の家、1982年には東京コロニーにそれぞれ情報処理センターを開設し、重度身体障がい者の本格的な職能開発を始めました。

当時、障がい者がプログラマーやシステム・エンジニアとして自立することは、社会復帰の道に新しく頭脳労働の分野を切り開くという画期的なものでした。1983年12月には、太陽の家と三菱商事



の共同出資により、新会社「三菱商事太陽株式会社」を設立。同社は、コンピューターによる情報処理の受託、マルチメディア・コンテンツ制作、オンデマンド印刷、Webコンテンツ制作などを手掛け、自らの力で経済的な自立を実現しようと活動し続けています。

⇒継続中

社会貢献40年の 歴史年表

※海外での取り組みを除く

社会環境室を設置〈1973〉

母と子の自然教室開始〈1974〉

人工臓器の研究・開発開始〈1974〉

リモート・センシング技術の研究開発援助開始〈1975〉

春の自然教室(児童養護施設児童対象)開始〈1978〉

東京コロニーへの支援開始〈1979〉

太陽の家への支援開始〈1979〉

三菱商事太陽設立〈1983〉

地球環境室を設置〈1990〉

熱帯林再生実験プロジェクト(マレーシア)開始〈1990〉

社会貢献に関する基本理念制定〈1991〉

社会貢献委員会設置〈1991〉

米国三菱商事財団(MIC 財団)設立〈1991〉

三菱商事留学生奨学金制度開始〈1991〉

大分国際車いすマラソン大会支援開始〈1991〉

熱帯林再生実験プロジェクト(ブラジル)開始〈1992〉

三菱商事欧州アフリカ基金設立〈1992〉

劇場 アートシアへの支援開始〈1992〉

ジョン万次郎ホイットフィールド記念国際草の根交流センターへの支援開始〈1992〉

はばたけ21 未来の子どもたちへ開始(新潟)〈1992〉

丸の内市民環境フォーラム開始〈1993〉

国際フレンドシッププログラム〈1993~2002〉

阪神淡路大震災義援金贈呈〈1995〉

環境レポートの発行開始〈1996〉

児童養護施設向けサッカースクール(Jリーグ)〈1996~2001〉

社会環境室と地球環境室の統合により環境室設置〈1997〉

ISO14001認証を本店にて取得〈1997〉

長野パラリンピック通訳ボランティア社員参加〈1997〉

1973

1980

1990

東京コロニーへの 支援

1979~

東京コロニーは、障がい者が仕事を通じて「(社会への)完全参加と平等」を実現することを目的とした社会福祉法人。三菱商事では1979年に訓練用コンピューターを寄贈した後、1993年からは、重度身体障がい者在宅パソコン講習事業などの「教育」、職業紹介・コンサルティング事業などの「雇用支援」、SOHOの支援事業などの「就労支援」という障がい者自立への3つの柱をバックアップすべく、支援を続けています。



三菱商事太陽

1983~

太陽の家は、障がい者がプログラマーやシステムエンジニアとして社会で就労するための授産施設を支援する目的で設立されたもので、三菱商事は、1979年から継続的に支援を続けています。1983年には、自立可能な障がい者が社会復帰し、能力を発揮する職場として、太陽の家との共同出資で「三菱商事太陽株式会社」を設立。コンピューターによる情報処理の受託、マルチメディア・コンテンツ制作、オンデマンド印刷を主な事業内容とし、受注から納品までを障がい者自らの手で管理・運営しています。



日米草の根交流 サミット大会

1992~

公益財団法人ジョン万次郎ホイットフィールド記念国際草の根交流センターは、日米交流促進のための財団法人で、三菱商事は1992年の設立当初からこの財団の理事会社をつとめています。同センターが主催する「日米草の根交流サミット大会」は、毎年日本と米国が交互に開催地となって、両国の市民が個人の立場で自由に意見交換し、相互理解と親交を深めることを目的としています。



国際フレンドシップ プログラム

1993~2002

さいたま市の「国際交流基金日本語国際センター」で研修中の外国人日本語教師と、三菱グループ4社(三菱商事、東京三菱銀行<当時>、三菱地所、旭硝子)の社員ボランティアが約半年にわたり交流を続けるもので、1993年から2002年まで実施しました。



MC International Scholarship制度開始〈2000〉

FC東京・ペガタ仙台サッカースクール開始〈2002〉

アースウォッチ支援開始〈2002〉

サステナビリティ・レポートが「持続可能性報告大賞(環境大臣賞)」受賞〈2003〉

エコツアー「ボルネオ熱帯林植樹祭の旅」開始〈2003〉

サンゴ礁保全プロジェクト開始

博物館・美術館プログラム開始

社員のボランティア活動をカウントする**トークン制度**導入

熱帯林再生実験プロジェクト(ケニア)開始

グリーンリボン ランニング フェスティバル支援開始

外部有識者による

環境・CSRアドバイザリー・コミッティー設立

三菱商事アート・ゲート・プログラム開始

YMCAインターナショナルチャリティーラン支援開始

大英博物館日本ギャラリーの10年間のスポンサーシップ決定

三菱商事千年の森(彌太郎の森)森林保全活動開始

スマイル アフリカ プロジェクト支援(シューズ寄贈)開始

社員食堂における社会貢献プログラム TABLE FOR TWO 開始

国連グローバル・コンパクトに参加

三菱商事環境憲章制定

「えほんのがっこう」活動開始

環境マネジメントシステム 環境方針制定

東日本大震災復興支援活動開始

林野庁の社会貢献の森を活用した森作り開始

熱帯林再生実験プロジェクト(インドネシア)開始

熱帯林再生国際シンポジウム開催(マレーシア)

タイ洪水支援

トルコ地震支援

フィリピン台風支援

三菱商事復興支援財団が公益財団法人に認定

CSRステーション **MC FOREST** オープン

東日本大震災復興支援の一環として「Moai 未来に生きる」展(モアイ像の展示)を開催

フィリピン洪水支援

米州ハリケーン支援

夏休みMC FOREST SCHOOL開始

スマイルアフリカプロジェクト・1,000足達成!ありがとう写真展開催

中国四川省地震に対する災害支援

フィリピン台風に対する災害支援実施

三菱商事社会憲章制定

障がい者スポーツ応援プロジェクト**DREAM AS ONE**開始

エボラ出血熱被災地支援

2000

2005

2006

2007

2008

2009

2010

2011

2012

2013

2014

サステナビリティ・レポートが 持続可能性報告大賞(環境大臣賞)受賞 2003

第7回「環境レポート大賞」(現「環境コミュニケーション大賞」)において、当社のサステナビリティ・レポートが持続可能性報告大賞(環境大臣賞)を受賞しました。同事業は、事業者の自主的な環境保全の取り組みを促進することを目的として1997年から実施されているもの。目的・目標が自社内の記述にとどまらない、業種特性を十分活かした内容で記述されており、経営者コミットメントを最大限網羅した形で報告内容であるとの講評を頂きました。



エコツアー 「ボルネオ熱帯林 植樹祭の旅」 2003～



環境保全を実践し地球環境を考えるきっかけをつくるツアーを、熱帯林再生実験プロジェクトが始まったマレーシアにおいて毎年実施しています。プロジェクトの実験地や原生林の視察、苗の植樹に加え、地元小学生との交流会などもあり、社員も多数参加しています。

環境・CSRアドバイザリーコミッティー 2007～



社外の有識者10名をメンバーとする「環境・CSRアドバイザリーコミッティー」を設置し、三菱商事グループの環境・CSRの取り組みに対しさまざまな視点からアドバイスを頂いています。当社の事業への理解を深めていただくべく、アドバイザリーコミッティーメンバーの方々には、定例のコミッティーに加え、年に一度、事業現場の視察も行っています。

三菱商事 復興支援財団 2012～



アップルファーム

東日本大震災の翌年に設立された当財団では、学生支援奨学金と復興支援助成金を給付。また被災した地域の力強い復興を目指し、地元の金融機関などと協働しながら、産業復興・雇用創出支援を行っています。水産業や農業など、これまで地域を支えてきた産業の再生を支援するとともに、新たな事業の立ち上げに取り組んでいます。

発行日 2015年3月31日
発行所 三菱商事株式会社 環境・CSR推進部
東京都千代田区丸の内2-3-1
URL <http://mitsubishicorp.com/jp/csr>

本誌記事の無断転載を固く禁じます。 ©2015 Mitsubishi Corporation